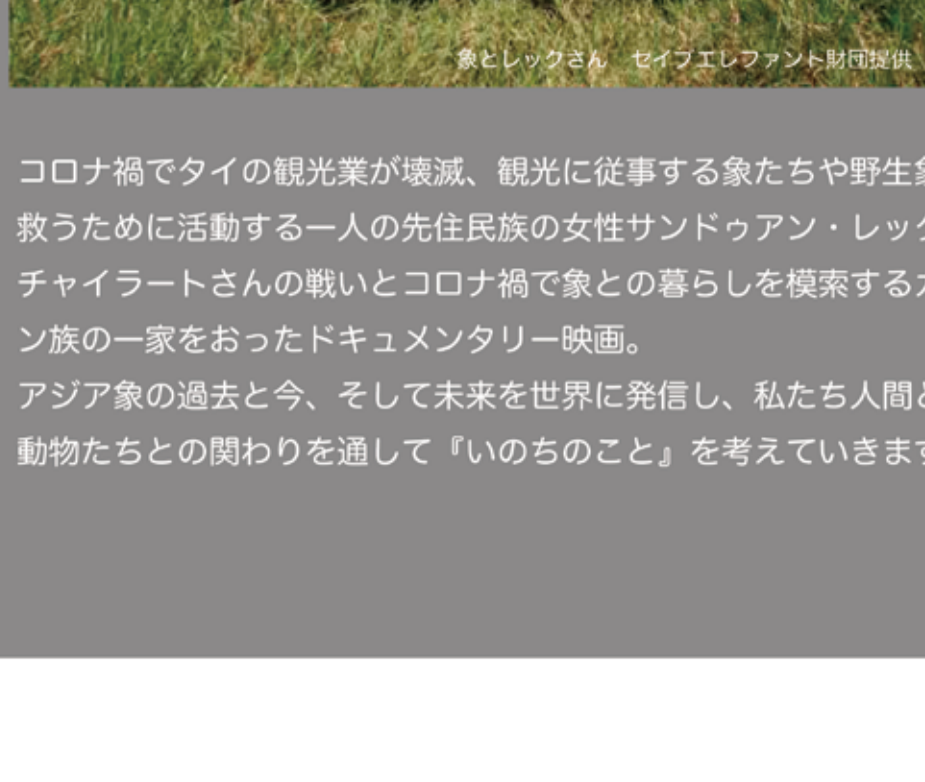


ドキュメンタリー映画 「エレファントの叫び」 制作の報告



2021年6月、タイのバンコク郊外にあるカラムンとドトのバイリンを救助しているレックさん



象とレックさん、セイブエレファント財団提供

コロナ禍でタイの観光業が壊滅、観光に従事する象たちや野生象を救うために活動する一人の先住民族の女性サンドゥアン・レック・チャイラートさんの戦いとコロナ禍で象との暮らしを模索するカレン族の一家をおたつドキュメンタリー映画。

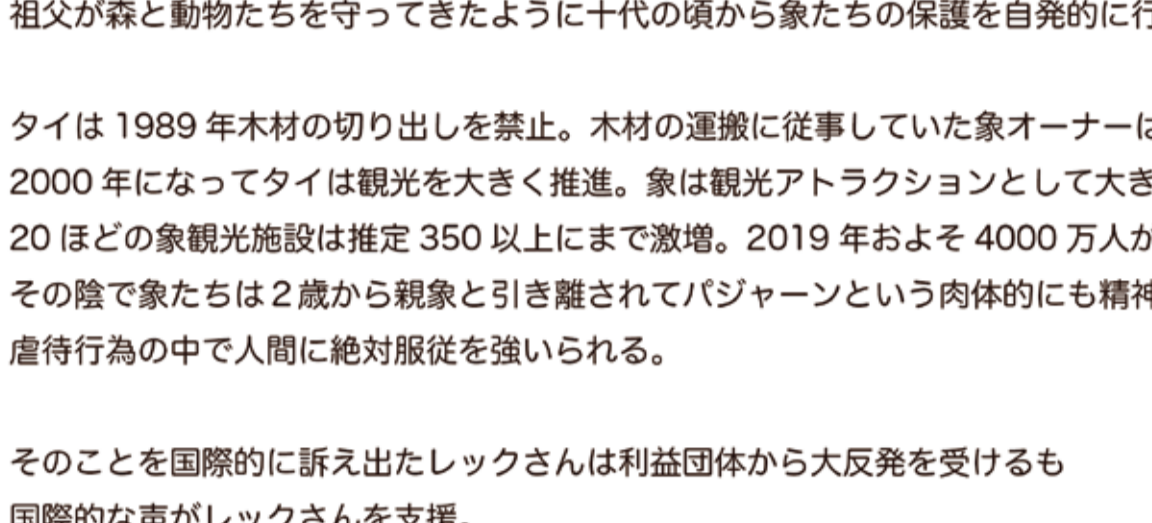
アジア象の過去と今、そして未来を世界に発信し、私たち人間と動物たちとの関わりを通して『いのちのこ』を考えていきます。

ドキュメンタリー映画 題名「エレファントの叫び」
物語のあらすじ (映画撮影開始 2021年4月ークラクアップ 2022年7月)

雷が鳴り大粒の雨が降ってきた。
カンチャナブリ県にチャン・ワンボーエレファントキャンプのマフォト(象使い)が
カイクック(推定65歳)の頭に跨っている。
カイクックをトラックに乗せようとしている。
抵抗するカイクックの頭を鉄の尖った鍵で突き刺す。
痛がって咆哮するカイクック。
頭を振って抵抗する。

他のマフォトも竹の棒でカイクックの足を突き刺す、攻防は30分以上
ようやくトラックに押し込む。
もう1頭のバイリン(推定25歳)を乗せたトラック2台は
800キロ北の象の保護施設エレファント・ネーチャーパークへ向かう。

エレファント・ネーチャーパークは1996年からサンドゥアン・レック・チャイラート
(通称レック)が運営する動物保護施設だ。
広さ100haの土地に104頭の象と大洪水や捨てられた犬や猫、猿、牛、水牛など
5000匹の動物が暮らす。



エレファント・ネーチャーパーク全景

先住民族カム族の出身のレックさんはシャーマンである祖父に自然のこを学ぶ。
祖父が森と動物たちを守ってきたように十代の頃から象たちの保護を自発的に行う。

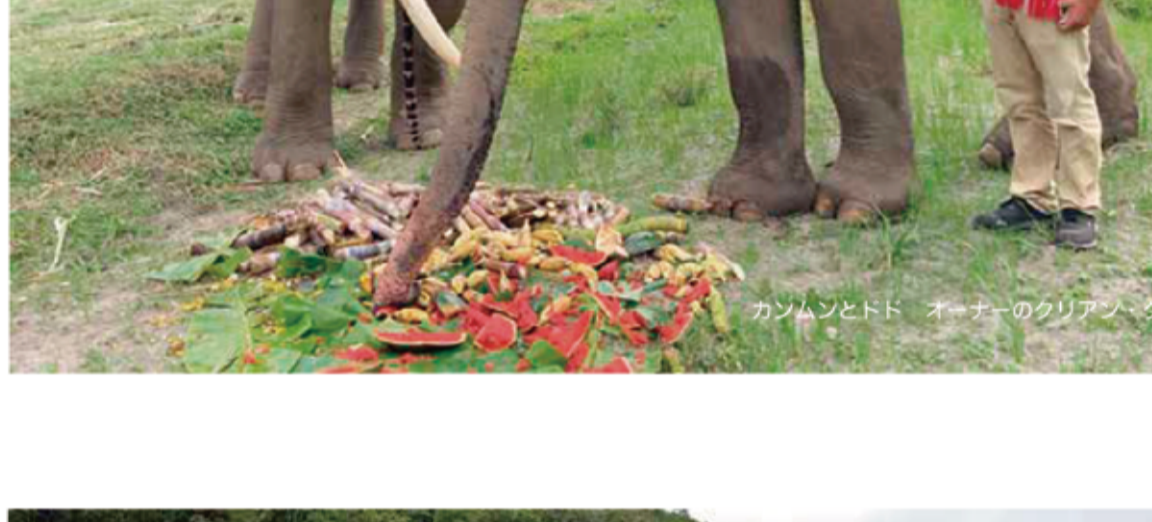
タイは1989年木材の切り出しを禁止。木材の運搬に従事していた象オーナーは失業。
2000年になってタイは観光を大きく推進。象は観光アトラクションとして大きく貢献。
20ほどの象観光施設は推定350以上にまで激増。2019年およそ4000万人が来タイ。
その陰で象たちは2歳から親象と引き離されてパジャーンという肉体的にも精神的に
虐待行為の中で人間に絶対服従を強いられる。

そのことを国際的に訴え出したレックさんは利益団体から大反発を受けるも
国際的な声がレックさんを支援。
少しずつ象観光の形が変わろうとしたところで2020年3月にパンデミックが起きる。
観光客のいなくなったタイの観光は大打撃を受ける。
レックさんはいち早く支援を国内外に呼びかけた。
そして、奇跡的なことが起こった。タイ支援者のFacebookのワンプオストがタイ国内で
大きなうねりをもたらして数千万バツの支援金が集まった。

2020年は242箇所象キャンプ場の1899頭の飼育象と1601人のマフォトの金銭及び
食料支援を行なった。2021年も継続して各地で食料支援を行なっている。
これまで子象時代から演技をさせてきた象キャンプのオーナーたちにも手を差し伸べる。
オーナーたちもこれまでのやり方を変えると約束するが、
多数の象を使って儲けてきたキャンプ場の飼育形態はなかなか変わらない。



カレン・エレファントホームのオーナーでカレン族のクリアン・クライさんも
コロナ以前は、観光客を乗せたりショーをして兄弟象と出稼ぎで働いていた。
コロナ禍、彼は決心して、故郷に帰って象と自分たちにとって幸せな暮らしを模索する。
レックさんの支援を受けながら地域に根ざした暮らしを象と共に築き上げようとしている。
コロナ禍で収入のないクリアン・クライさんは無農薬の野菜栽培、池を作って魚を養殖。
象は山に放つ。コロナ後は兄弟象がいるホームステイを計画。



カラムンとドト、オーナーのクリアン・クライさん



山で自由に食べ歩くカラムンとドト

レックさんは国内外の支援を得て別の土地でさらに多くの象や他の動物を
保護しようとしている。

新しい土地に立ち、レックさんは動物たちも大事なこの地球の存在で、
人間の自然、動物への横暴はやがて自分達を滅ぼすと言う。

雨季の終わり、コロナ禍で戻ってきた村の若者たちも加わり稲の刈り入れ。
弟象のドドはこっそり突った稲を頬張る。弟象を見たクリアン・クライさんは泥棒象だ！
と言って笑いながらドドを田んぼから追いやる。
村人たちと脱殻するそばでイネの根をはらむ兄弟象のカムモン。
2022年6月雨季に入りクリアン・クライさんは田植えをしている、
ホームステイの観光客も田植えを体験。
見上げると山の斜面には大きな2頭の兄弟象がいる。
新しい象との暮らしの一つがここにはある。

映画のサイト https://mars-elephantmovie.com/index.php/?language/ja/homepage/ Instagram https://www.instagram.com/eslan_elephant_movie/ Facebook https://www.facebook.com/Roers-of-The-Elephant-107776538218087 Youtube https://www.youtube.com/channel/UCdK9QGe_gXyVd_myY1Bx54A	連絡先、タイ在住 奥野安彦 Yasuhiro OKUNO (代表) Mobile: (66)-(0)-850375420 Email okunoy@mac.com K.M.Tomyam Co., Ltd. 168, Moo 1 Chomdoi Road, T.Changpuak, A.Muang Chiang Mai, 50300 THAILAND Tel: (66)-(0)53-217-170
--	--

タイの中に広がるコロナウイルスと象

・コロナ禍のタイの現状
2020年3月末にはタイもロックダウンが始め、海外への移動も制限された。
GDPの20%を占める観光業。年間4000万人の観光客は途絶えた。
象キャンプで働く3,700頭の象たちも失業した。
国の援助が全くない中で、観光に従事する象たちを長く続くコロナ禍でオーナーは
収入を無くして象たちと与える食料にも事欠くようになり、象たちは飢餓の危機に直面している。
また、1940年代は国、タイの森林の面積は国土の60%以上を占めていた。
現在は森林面積は国土の32% (2016年)のworldbank.org 調査データ。
農業開発が進み森林が減少して象の生活環境は狭められて人間と象の衝突が増え、
2012年から2018年までに野生象が25頭、人間が45人命を落とした。
2020年の4月から始まったロックダウンは功を奏して押しさえ込み成功していたが
2021年になってデルタ株が出現して8月以降は連日2万人の感染者が続いている。
ワクワン接種も調達が遅れて進んでいない。失業者は2021年6月現在65万人
(※出典タイ国家経済社会開発委員会事務局)

・およそ350箇所のエレファントキャンプの現状
1989年に森林伐採が禁止になり、それまで木材運搬で働いていた象たちの働く場所を
確保するために象が観光の担い手になった。最初は20箇所ほどの象キャンプ場が
2010年に入り観光産業の目玉として急成長。観光アイテムとして欠かさない存在になる。
しかし、2020年4月より全ての象キャンプ場は休業状態もしくは閉鎖に追い込まれている。
1年以上も収入のないキャンプオーナーたちは休業に事欠くようになっている。

・サンドゥアン・レック・チャイラートさんの戦い
自身も象や動物たちを保護する施設であるエレファント・ネーチャー・パーク
1996年に設立した。
象を観光に従事させ過酷な状況に追い込むことに反対の声をあげた。
しかし、象は観光で大きなお金を生み出す。
象キャンプオーナーから反発を受けレックさんも命の危険を感じながらも海外の支援を
受けながらタイで声を上げ続けてきた。
海外での動物福祉意識が高まるに従い、レックさんの考えに共鳴する象キャンプオーナーも
増えてきた北タイでは象乗り、象の演技をやめる象施設が増えた。
そこに2020年コロナが襲ってきた。
閉鎖を余儀なくされた観光象キャンプ場の収入が途絶えた。
自身も立ち上げたセーブ・エレファント財団が国内外から資金を集めて
象たちや象を世話する飼育員たちの支援を始めた。
2020年タイ全土に点在する242ヶ所の象キャンプとそこで暮らす1899頭の象、
象キャンプで働く1601人の飼育員たちに、金銭、食料の支援を行っている。
2021年、現在も象たちへの食料支援を継続している。

・野生象の出現
2017年の象の日に、国立公園局は野生の象の数が7~10%増加していると発表した。
しかし、1900年初頭に10万頭いたアジアの野生象は4万頭まで激減。
タイには現在3500頭の野生象がいる。
人間とゾウの衝突は、2000年頃からエスカレートしている。
2012年から2018年の間に、対立が激化したことによるゾウや人間の死傷者は107人でした。
この6年間で少なくとも25頭の野生のゾウが死亡しているが、
その多くは農家がゾウを農作物から遠ざけるために張った電線による感電死である。
同じ期間に45人の人間が野生のゾウに殺されている。

・日本人に向けて
日本でも動物福祉の考え方が広まりつつあるが、しかしながら欧米に比べると
かなり遅れているのが現状。
象たちの演技の背後には虐待行為が存在する。それらをもっと知って頂きたい。
また、象は群れを作る動物で1頭だけをコンクリートの中で
飼育する日本の動物園にも飼育方法を改善して頂きたく願う。

製作者プロフィール

プロデューサー、監督
奥野安彦
1979年写真家、映画監督の本橋成一氏に師事。1987年に写真家として独立し、
翌年、ソウルオリンピック取材。1988年から1994年まで、アハルトハイト政権下の
南アフリカでマンデラ大統領誕生までを写真と映像で取材し、日本の朝日、雑誌、朝
日新聞系CS放送「朝日ニュースター」でビデオジャーナリストとしてレポートする。
1995年の発生直後から阪神淡路大震災とその後を3年間わたって記録し、
「アエラ」、「アヒゲラ」などで発表。
1998年からバリリンビックスリーの写真記録を始め、長野とシドニーの
バリリンビックスリーを取材し、日本の雑誌で発表。
2004年、CS放送局の特派員としてタイに赴任。同放送の番組「アジアビュー」で、タイ
の社会、文化、暮らしを紹介する30分番組を16本企画制作。2005年、
映像制作会社K.M.Tomyam Co.,Ltd.を共同設立し、
以来、東南アジアを基盤に映像制作に取り組み。
2014年には「国境なき医師団(イス、日本合同チーム)」の画像制作プロジェクトで、
アフリカのスワジランドに1ヶ月滞在し、現地のHIVの現状を記録。
K.M.Tomyam社は現在、NHKワールドの多言語放送番組「Direct Talk」(15分番組)、
ドキュメンタリー「Side by Side」(30分番組)の企画、撮影取材も担当している。
著作に写真集「ウブントゥー-南アフリカに生きる」(第三書館)、
写真集「互換の風貌」阪神淡路大震災の記録(リトル・モア)、
写真集「BODY〜バリリンビックスリーの記録(リトル・モア)、
共著「ガジュマルの木の下の」HIV感染児と暮らしの事業家の物語(岩波書店)、
共著「てつびん物語」阪神淡路大震災のある被災者の記録(信成社)ほか



プロデューサー、共同監督、編集責任者
佐保美恵子
学院大学フランス文学部卒業。1980年代半ば、ファッション雑誌、編集プロダクション勤務後、
フリーライター。
1988年から6年間、激動する南アフリカで同国の社会、文化、伝統を奥野安彦とともに
取材し、日本の雑誌や朝日新聞系CS放送「朝日ニュースター」で映像レポートする。
奥野と結婚後、子ども2人を育てながらフリーライターとして「アエラ」
「コスモポリタンジャパン」などで主にインタビュー取材、執筆を担当。
「バーンカムサイ」と創設者名取美和氏を取材し、日本のメディアで多数紹介。
2004年、CS放送局の特派員としてK.M.Tomyam Co.,Ltd.をサポートし、
奥野が立ち上げた映像制作会社K.M.Tomyam Co.,Ltd.を共同設立し、
環境問題、自然保護、サステナビリティに関するテーマに強い関心をもつ。
NHKワールドの多言語放送番組「Direct Talk」ではインタビューを兼ねる。
著作に「マリアの道〜アハルトハイトを超えて」(文芸春秋)、
「生きるって素敵なこと(名取美和とバーンカムサイの子どもの声)」(講談社)、
「千の風について」(講談社)など。



連絡先、タイ在住
奥野安彦
Yasuhiro OKUNO
(代表)
Mobile: (66)-(0)-850375420 Email: okunoy@mac.com
K.M.Tomyam Co., Ltd.
168, Moo 1 Chomdoi Road, T.Changpuak,
A.Muang Chiang Mai, 50300 THAILAND
Tel: (66)-(0)53-217-170